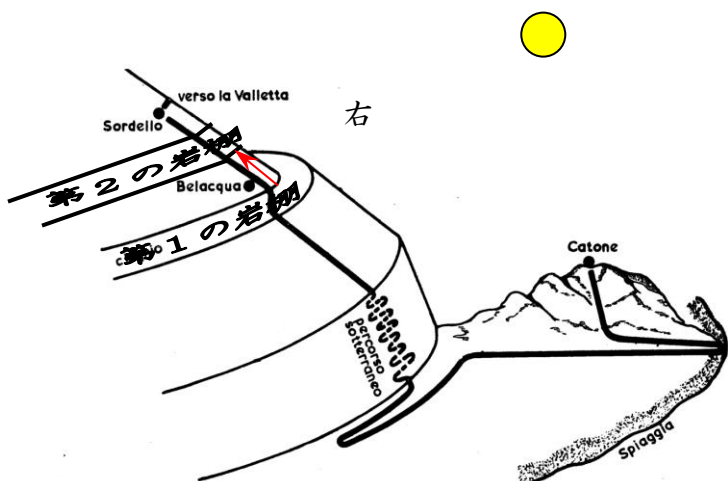


1-6：怠惰者たちはダンテが影を落としていることに気がつく



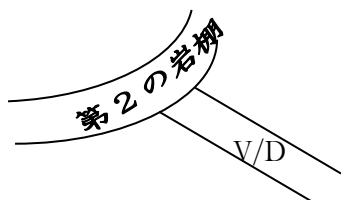
煉獄篇第4歌 56-57 ではダンテの右側に影が落ちていたが、それはダンテが東（浜辺）の方を向き、太陽が左から射しているためである。それに対して、今は東（浜辺）に背を向け、山を垂直に上っているため、太陽はダンテの右側から射し、左側に影を作っている。ダンテの向きが変わったために、ここではダンテの進行方向に対して左側に影が落ちている。

10-15：ウェルギリウスの警告 《ウェルギリウスたちを培ったローマの哲学（ストア的精神）》

ストア派の理想の境地を《アパテイア ἀπάθεια》と呼ばれる。ストア派の理想の境地は不動の要塞のように、いかなる外的な衝動（衝撃）にも揺り動かされることなく、あらゆる情念と感情の動きからも解放されて、それらの影響を被ることのない不動の心の状態に達することにある。

16-18：拡散せる精神は何事も成し遂げ得ない

22-24：新たな集団との出遭い

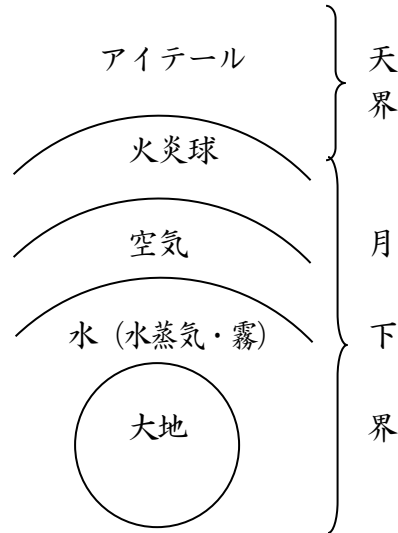


37-40：人の速い動きに対する気象現象の比喻

【火性の蒸発物 [流星と稲光]

アリストテレスの気象学では「蒸発物 vapori」には「湿性」と「乾性」の2種類があると措定されていた（現代科学では認められていない）。「乾性の蒸発物」は熱によって容易に発火すると考えられていたため、上層天空にある火球層に到達した「乾性の蒸発物」は発火して「流れ星」になると信じられていた。このため、火球層に到達した「乾性の蒸発物」をダンテは「火性の蒸発物」と呼んでいる。現代では宇宙空間からやって来た0.1ミリ～数センチの塵が秒速10～70kmの高速で地球へと降り注ぐ過程で、大気分子と衝突してプラズマ化したガスが発光するためと説明されるが、古代や中世では「流れ星」も大気現象の一つとみなされていた。流れ星が宇宙から地球大気に突入する小さな物体であると初めて正しく認識されたのは1833年のことであり、天文学者のデニソン・オルムステッド（Denison Olmsted）によってである。しかし中世の科学では、流れ星や隕石が地球圏の外からやって来て大気圏に衝突して火を放つという考えは受け入れられないものであった。火炎球よりも上方の世界は完全無欠であり、いかなる変化も被らないと固く信じられていたからである。軌道を外れた隕石がやって来るなど論外であった。従って、地球圏

内部の事象（乾性の蒸発物）でこれらの諸現象を説明しようとした。



49-51：ダンテに懇願する魂の一団

「誰か見覚えのある者がいないか」と尋ねるのは、代禱してもらう必要があるからである。「立ち止まってくれ」という言葉に、彼らの不安が表わされている。ダンテがつれなく立ち去っていくのではないかと懸念している。

52-54：人生の半ばで突然命を暴力で断たれた者たち 《βιαιοθάνατοι》

「神の恩寵が私たちの内面を照らし出し、私たちに自分たちの罪を自覚させた」のであり、自分で「天の光に目覚めた」（平川訳）わけではない。神がその恩寵で盲を啓いてくれたのであり、気づかせて頂いたという感謝の念が示されている。実際、天国篇の最後の歌章の最後においてもダンテに光が恩寵として下り来て、彼に真理を会得させる。あくまでその《気づき》も天祐あつてのものなのである。キリスト教においてこのニュアンスは極めて重要である。

【どんな罪人にも今わの際まで常に救いの可能性がある】

「磔にされた悪人の一人がイエスを侮辱して言った。《おまえさんはキリストじゃないのか。だったら自分で自分を救い、俺たちも救ってくれ。》もう一人の悪人が答えて、この者を叱って言った。《同じ裁きを受けているのに、おまえは神を恐れないのか。われわれがこの裁きを受けるのは正しい。自分たちがやって来たことに相応しいものを受けているのだから。しかし、この方は何一つ曲がったことはなさっていない。》そしてイエスに言った。《主よ、あなたの御国にいらしたら、どうか私のことを思い出して下さい。》そこで、彼にイエスは言った。《アーメン、おまえに言う。今日おまえは私とともに天国にいるであろう。》」  
～『ルカ福音書』23,39-43～

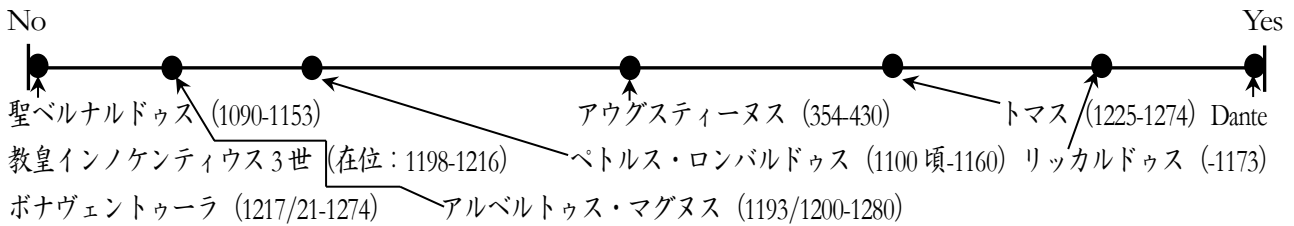
55-57：「人は他人の非を赦して初めて赦される」→「他人を赦さなければ、自分も赦されない」

【第2の岩棚にいる魂たちの共通の運命】

- ①暴力によって人生の途中で非業の死を遂げた者。
- ②死の直前まで罪人であった。
- ③死に際に恩寵を受けた。

- ④前非を悔い、敵の罪を赦し、和悦心を起こした。 } 煉獄の魂全員に  
 ⑤神に見えたいという願望に苛まれている。 } 共通の心情

《末期の悔悟が救いをもたらすか》



【教会は「秘跡なしには天国には行けない」として人々を脅してきた】

宗教が組織的化すると、宗教が介入しなければ、天国に行けないと言ひ募る。だが、ダンテは、破門者マンフレディの場合と同様、人は教会の外でも救われることを主張している。重要なことは各自と神との個人的な関係だけである。煉獄にいる魂たちはみな他者の非を赦す選択をした人たちだということを意味している。他者を赦さなかった者は地獄にいる。他者の非を赦した者だけに煉獄界が開かれる。そしてこの《赦し》の中にこそ、人間だけが有する自由意志の最高の選択が顕現する。現代科学でもこの自由意志を疑う議論がある。所詮、自由に意志選択しているように見えても、実際は無意識の世界で選択がなされており、真の意味での自由意志は存在しないという主張である。しかし、《赦し》という行為は無意識の選択のなせる業とは言えない。なぜなら無意識～本能～は赦さないことを選択するからである。自分の愛する者/モノを奪った相手に対する恨み・憎しみは本能的なものであり、全身が《赦さない》と主張する。それに反して《赦し》という行為は自由意志によってしか為し得ないものである。これこそが自由意志の最高の使い方だとイエスは述べている。誰も自分の命を奪う者、自分の愛する者の命を奪う者を赦したくはないからである。本能のレベルから意識のレベルのすべてにおいて憎しみが充満しているはずである。唯一自由意志だけがそれに抗うことができる。《自由な》意志とは潜在意識の拒否感に抗いながら、自身の内なる悪を省みる選択であり、他者の非を自分が赦すことができるかどうかの選択を意味する。ここにこそ確かに自由意志は存在するのである。

「汝を害する汝の隣人を放念せよ。そうすれば、祈り求める時、おまえの罪は取り消される。」  
 ～『シラの手紙 (集会の手紙)』 28, 2～

「もし誰かに抗してあなたが何事かを有しているとしても、赦しなさい。そうすれば、天にましますあなた方の父も、あなたの過ちをお赦し下さるだろう。」  
 ～『マルコ福音書』 11, 25～

「あなた方が人を裁くように自分も裁かれ、あなた方が量るその升であなた方も量り返される。」  
 ～『マタイ福音書』 7, 2～

「赦しなさい。そうすれば、あなた方も赦されるだろう。(中略) あなた方が量るその同じ升であなた方も量り返されるからである。」  
 ～『ルカ福音書』 6, 37～

「わたしたちは赦すことによって赦され、死ぬことによって永遠の命をいただくのです。」  
 ～アッシジのフランチェスコ『祈り』より～

67-72：ヤーコポ・デル・カッセロ 《教皇派》

1260年頃ファーノの名高い家系に生まれた。主に政治と軍隊の世界に身を置いた。1288年、ファーノの軍隊を指揮して教皇派のフィレンツェの救援に駆けつけ、皇帝派のアレッツォ軍と戦った。彼は1288年春アレッツォ軍に対抗する軍の派遣に加わるためにフィレンツェに来ている。そして翌年のカンパルディーノの戦いにダンテとともに従軍したはずである。1294年にリーミニのポデスターとなった。1296年にボローニャのポデスターに就くと（-97年）、彼はボローニャの自治独立を懸命に守ろうとフェッラーラの侯爵であるエステ家のアッツォ8世（1298-1308）の野心にことごとく対抗した。彼は侯爵の私生活についての根拠なき誹謗中傷を広め、不和となった。これが彼に対する復讐心を侯爵に芽生させ、侯爵はデル・カッセロを亡き者にする誓いを立てた。1298年冬にミラノのポデスターに任命されたデル・カッセロは、ミラノに赴くのにアッツォ8世の報復を恐れ、エステ家のフェッラーラ領内を避けてヴェネチアまでアドリア海沿岸の道を選んだ。しかし、フズィーナから川沿いにドーロ（パードヴァ北西の町）に向かっている途中、オリアーゴでエステ家の刺客たちによって殺害された（享年38歳前後）。切り裂かれた遺骸はファーノに返還され、サン・ドメニコ教会（Via Arco d'Augusto）に埋葬された。この教会はマリアに捧げられた教会であり、ヤーコポは聖母に対する信仰が厚かった。それゆえ、ちょうどボンコンテと同じように、彼の最後の思いはマリアであったろうし、マリアは彼を天に呼んだはずである。ヤーコポの死を悼んでファーノの町が悲しみに暮れたという。興味深いのは、次の一節である。「最後までヤーコポが生きただ徳は誰かの手によって歌われるにふさわしいものである。」この碑銘の無名の作者の呼びかけにダンテが答えようとしたのではないかと、ピコーネは述べている。（cf. Michelangelo Picone, *Canto V*, in *Lectura Dantis Turicensis: Purgatorio*, 2001, p. 82）

75：アンテーノールの者たち

アンテーノールはトロイアの有名な老将で、トロイア人の中で最も賢明な一人とされていた。トロイア陥落後、イタリアに落ちのびて《パタウィウム Patavium》（現パードヴァ）を創建したと云う。この伝説からパードヴァ人自身が自分たちのことを「Antenori アンテーノールの者たち」と呼んでいた。この語自体に侮蔑的な意味があるわけではないが、ダンテはこの呼称に裏切り者のイメージを見ていたと思われる。

トロイアの陥落の折、彼はギリシャ軍から危害を加えられなかったこと、ギリシャ人を厚遇したことから、後世、アンテーノールはギリシャ人と通じていたという伝説がまことしやかに作り出され、すでにセルウィウス（4世紀後半～5世紀初頭）の『アエネーイス註釈』第1巻242）には「祖国の裏切り者 *proditor patriae*」という評価が紹介されている。中世では「祖国を裏切ってパッラーディオ（その所有者の町を保護する力があると信じられたアテーナーの神像）を敵に渡し、木馬の中のギリシャ兵を助けた」という伝説が広く流布した。ダンテは、当時の通説に従い、アンテーノールを祖国を裏切る代名詞として使っている。地獄第9圏第2円環（祖国や党を裏切った者たちの墮ちる場所）《アンテノーラの領域》は彼の名に由来している。

88：死後の魂のアイデンティティー

88 私はかつてモンテフェルトロ家の者だった。今はボンコンテだ。

「遠過去と現在形という時制の違いによって現世の貴族の肩書（死とともに消え去る）と個人を特徴づける名前（いつまでも保持される）とのコントラストを意図的に浮き彫りにさせている。」

(Bosco & Reggio)

「ソクラテスの魂が肉体に宿っている時には、ソクラテスは存在するであろう。しかし、彼の魂が最善なるもの [直知界: 死後世界] に到達したその時、ソクラテスとしての個別的な存在 [肩書や姓] は消滅してしまうことになるであろう。だが、真に存在するものはいかなるものも消滅し得ない以上、諸々の個別的な知性は、あの世界 [直知界: 死後世界] においても消滅することはない。それぞれが存在の本質的な同一性を保持しながらも、異他性 (アイデンティティ) において区別されながら存続する。」

～ブローティーノス『魂の諸問題について (第1篇)』エネアデス IV, 3, 5～

#### ボンコンテ・ダ・モンテフェルトロ (1250/55-1289) 《皇帝派》

父グイード・ダ・モンテフェルトロ (地獄篇第27歌) によって軍人としての薫陶を受けて育った。1288年、トッポの戦い (地獄篇第13歌121) でシエナ軍に勝利したときの指揮官の一人。1289年、アレツォの皇帝派を率いてフィレンツェ軍とカンパルディーノの平原で戦った。享年34-39歳。

#### 92: カンパルディーノ (ポッピの城とロメーナの間に広がるカゼンティーノの平野) の戦い

ここで1289年にフィレンツェのヤーコボ・デル・カッセロたちが指揮する《教皇派》とボンコンテ率いるアレツォ《皇帝派》の有名な戦闘が繰り広げられた。フィレンツェ教皇派は、アレツォ皇帝派をカンパルディーノの戦いにおいて完膚無きまでに打ち破るが、このときダンテはフィレンツェ教皇派の一騎兵として従軍していた (地獄篇第22歌4参照)。この3人は偶然にも、運命の日、同じ場所、同じ時間に居合わせていた。その時は互いに顔と名前が一致しなかったが、彼岸の世界で、これが偶然の一致ではなかったことを悟ることになる。ヴィッラーニ (『年代記』VII, 115 & 131) や年代記作者のマラスピーニの証言によれば、戦闘後、ボンコンテの遺骸は跡形もなく消え去り、見つからなかった。ダンテは、戦闘当日、空に厚い雲が垂れこめていたことから、このような物語を創作している。

#### 103-105: 真実を語る《子 (ボンコンテ)》と虚偽を語る《父 (グイード)》

「父親は何年も修道士として務め、教皇から贖宥を受けながらも永遠に墮罪している。対して、息子は唯一のマリアへの呼びかけと一粒の涙で救われるに十分であったという対比が強調されている。」

(Chiavacci Leonardi, *Introduzione*, p. 81)

#### 104-105: 天使と悪魔による魂の奪い合い

「わしが死ぬと、フランチェスコがわしのために来てくれたが、黒天使の一人が彼に言った。

《連れて行くな。不正な振る舞いはさせぬぞ。

ペテンの助言を行った以上、

こいつは下界に墮ちて、俺の奴隷どもに伍する定めだ。

それ以来、俺はずっと奴の後に張りついていた。

悔悛してない奴が贖宥だと、笑わせるな。

(罪を)悔悛しながら、同時に(罪を犯そうと)望むなぞあり得ぬ。  
相矛盾するものが、同時に並び立つ道理などないからだ。》

おお、何たる不運！ 黒天使がわしを掴んで、《きつと、おまえは  
俺がこうも論理に長けているとは、思いもしなかっただろう！》

と言ったとき、わしははっと目覚めた。

わしはミノスの許へ連れ去られた。ミノスは  
硬い背に尾を8回捲きつけると、  
憤怒のあまり、自らの尾に噛みついて、

言った。《こいつは、火に包み隠されるべき罪人だ。》  
かくて、わしは、ご覧の場所で永遠の破滅を味わい、  
このように炎を纏<sup>まと</sup>い、無念の思いで進むのだ。」

～地獄篇第27歌 112-129～

### 父グイードの欺瞞

フランチェスコの逸話はグイードの創作である。(欺瞞者は自分に都合のよい話を捏造し、それを信じ込む。)①天の御使いが自身の敵である悪魔と口論することは絶対にあり得ないからである。グイードの語る逸話の中では、フランチェスコが単なるお人好しの～愚鈍と言った方がふさわしい～役を演じているが、フランチェスコは純白の薔薇(天国篇第32歌35)の中でも最も高い席の一つに座を占める聖者である。グイードの話に登場するフランチェスコは、太陽天でトマス・アクイナスが畏敬の念を以って描き出すフランチェスコ像とあらゆる点で食い違っている。従って、霊界で最も強力な聖者の一人である聖フランチェスコがこのような愚鈍な役割を演じることは絶対にあり得ない。②同様に、フランチェスコがグイードの救いが確実であると確信し得たなどということも絶対にあり得ない。なぜなら天国の魂は、神の意志の結果を少なくとも確実に知ることができるからである。当然のことながら、フランチェスコ修道会に誓願を捧げたグイードのことをフランチェスコが知らないわけもない。一方、グイードが語る聖フランチェスコは間抜けのお人好しでしかない。ここにもグイードの高慢さが示されていると同時に、フランチェスコ会士でありながら、彼の理解するフランチェスコ像が図らずも露呈している。グイードは天国を知らないため、天の仕組みも天の至福者の認識力も全く知らない。③加えて、至高天の至福の魂が自身の特別席を離れて地上に降りゆき、死者の霊を天へと連れて行くという手続きは前代未聞であり、『神曲』においてこのような事例は一つとして存在しない。あくまで、その役は天使が担う。それが天使の仕事だからである。そもそも明知というものは神から発する恩恵である。悪魔は神に反逆した結果、この明知の霊流を断たれており、それを受けることができない。その悪魔が、明知において神の傍に座す天の至福者に勝ることは絶対にあり得ない。従って、悪魔と天の聖者による魂の争奪は絶対にあり得ないことになる。もし本当に天の御使いが魂を迎えに来たならば、必ず天の御使いが勝利を収める。なぜなら天の御使いは神の傍にいて、神の判決を完全に知っているからである。実際、そのための物語をダンテはここ煉獄篇第5歌で用意している。そこでも魂を迎えに来るのは天使であり、天の至福者ではない。グイードの息子ボンコンテ・ダ・モンテフェルトロが真実を語るのに対して、父グイードは真実を騙っている。また、天使がボンコンテを掴むのに対して、グイードを掴むのは悪魔である。悪魔は天使の意志に逆らうことはできない。眼を飛ばして、ハイエナのように残り物をかっさらっていくことができるだけである。グイードはフランチェスコの作り話を挟み込んで自己を正当化し、自己の責任を矮小化し、自己のために嘘をつき続けている。

「悪霊は真実を語っても、それは欺かんがためである。」

～トマス・アクイナス『神学大全』I, q. 64, a. 2, ad. 4～

グイードは自己欺瞞の典型であり、自分で自分の嘘を信じ込み、他者にもその嘘を信じ込ませようとする。彼が生前《狐》と呼ばれて恐れられたのも、彼のこの欺瞞的な性格のためである。

#### 112-129：悪魔の方法

天使たちは諸天球を動かし、宇宙の秩序を維持し、神の意志を伝える役を果たしている。天使たちが宇宙の秩序のため、他者のために、すなわち自分たち以外のものに資すべく自分たちの能力を用いるのに対して、悪魔は自分たちの欲望を満たすためにのみ自分の能力を用いる。これはとりもなおさず地上においても同じように当てはまる。

悪魔は元々は天使であったので神によって創造された時、こうした力を与えられていた。天使がその知性で天上界の天球を司って動かしているのに対して、墮天使である悪魔は、劣った知性しか有していないため、その知性で作用を及ぼすことできるのは、月下界の下方の世界に限定される。すなわち、気象現象を操ることができるだけである。このため、「大気の権能の君主」と呼ばれるのだが、その知性を悪に結びつける悪魔は気象現象を使って悪意を表現する。悪魔は自然に働きかけることのできる力を有しているが、ただし、神と違って自然法則の枠内においてのみそれを行使できる。第5歌がアリストテレスの気象学の理論に沿って描写されているのは、知識の披歴ではなく、悪魔がその物理法則に沿ってのみ力の行使ができることを示すためである。悪魔も物理的・自然法則の枠に沿わなければならないのである。この自然の法則を逸脱できるのは唯一神だけである。神が奇跡なし得るのも、物理法則に従わないためである。このため神は超自然の御業を為されると言われる。地獄では物理的原因なしに永遠の雨や炎が降り注ぐ。地獄が神によって創造されたときれるのもこのためである。また、悪魔は非物体的な存在であるため、物体に直接作用を及ぼすことはできない。ここで重要なことは、悪魔はボンコンテの肉体に虐待を加えたくとも、自身は非物体的な存在であるため、直接手を下すことができない点にある。そこでまずは水を蒸発させ、風を起こし、嵐を作り出し、雨を降らせて水流の力を借りて、間接的にボンコンテの肉体を翻弄するのである。悪魔の目的はボンコンテの胸に組まれた十字を解いて砂礫に埋めることにある。自分の手で直接ボンコンテが組んだ十字を解くことができないために、水流という水の暴力を使って解くのである。（十字を解くことでキリスト教徒としての埋葬の儀が為されないようにするためである。）要は、腕の十字を解くためだけに、悪魔はこれだけの大仰で大がかりな仕掛けを行なっているのである。それに対して、イエスはどうか。イエスは反対に、この嵐をたった一声で鎮めている。「イエスは風と水の波を叱りつけた。すると、止んで凪になった。」（『ルカ福音書』8, 24）悪魔が大仰に気象現象を利用して悪事を働こうとするのに対し、イエスはたった一言で自然を宥める。低俗な存在ほど大仰で大立ち回りをしてみせるものである。イエスが自然を鎮め、平安をもたらしたのとは反対に、悪魔は自然が持つ力を乱用し、自然を悪用する。

#### 同じ主題による3つの《変奏曲 variatio》

ヤーコポの物語 →ボンコンテの物語《敷衍 amplificatio》 →ピアの物語《短縮 abbreviatio》

ヤーコポの長い《未完の》物語から、ボンコンテの長い《完結した》物語へと移り、最後にピア

の未完の《短い》物語で終わる。同じモチーフがたっぷりと扱われもすれば、単に暗示されるだけ、完全に省略されるだけのものもある。『神曲』の中で最も忘れがたいこの3幅対の物語の奥深い構成は、3つの本質的なモチーフを予め規定している。この3つの重要なモチーフすべてが現れ出るのはブオンコンテのエピソードにおいてのみである。

- ①代禱の懇願（ヤーコポ、ボンコンテ、ピア）
- ②人生の最後の瞬間（ヤーコポ、ボンコンテ）
- ③マリアによる登場人物の救い（ボンコンテ）

#### ピア殺害の動機「私を殺したわが夫が、真相を一番よく知っている」の解釈

【解釈①】ピアの不倫（初期注釈家オッティモ）

【解釈②】夫が未亡人マルゲリータ・アルドブランデスキと結婚するため。

私は、地獄篇と煉獄篇はむしろ鏡映対称となっていると考えている（Siena mi fé, disfecemi Marenmaと同じように）。つまり、不義を働いて殺されたフランチェスカと、不義を働かず（咎もないのに不当に）殺害されたピアという関係である。ピアは、フランチェスカとは逆に、不義を働かずに殺され、夫の方が不義を働いて妻を殺したと推測できる。もし夫を愛していなかったなら、自分たちの婚姻を大切そうには語らないはずだからである。彼女が煉獄にいるという事実は、恨みつらみを脱して、夫の罪を赦したからに他ならない。また、契りの情景が死後も残っていることは、ピアが夫を愛していた強力な証拠である。そしてピアは夫によって殺害されたという事実である。以上の三つの条件から導かれる結論は一つしかない。彼女は、夫を愛しながら、夫に裏切られて殺された女性であり、それなのにそれを恨みがましく遺恨を抱き続けることもない女性である。それどころか、けなげにも自分にそのような不実な仕打ちを行なった夫を赦し、ひたすら未来の至福と平安を求めている。ここに第5歌を締め括るにふさわしい赦し～赦しがたい罪を赦す～が示されている。ピアは夫を赦し、夫に復讐を求めないが、やはり夫が不実を働き、自身を殺害した事実だけは忘れられないのであり、現世の人々には知ってもらいたかったのである。これがピアの語る一切である。

#### ダンテの意図

ダンテは、ピアがどのような死を迎えたのか一言も言及していない。ヤーコポとボンコンテに関して、彼らがどのように死んでいったかを具体的に記述し、その場所も事細かに特定しているのに対して、ピアについてはこうした詳細は一切省かれている。従って、ピアに対する詳細を一切欠いたダンテの描写は意図的なものである。つまり、ダンテは彼女をヴェールにかけ、故意にぼかしているのである。「私はピアです。シエナで生まれ、マレンマで殺されました。私を殺した夫がその真相を知っています。」語られているのはこれだけである。それは、歴史と人々から忘れられた女性に光を当てようとダンテが意図したからに他ならない。歴史家や研究者がいくら調べても何も出てこないのは、このためである。ダンテが最初から歴史（史料）に残っていない女性を選んでいるのに、研究者は古文書館でダンテの意図とは反対方向へ無駄な努力を重ねてきた。これらの研究者の考えとは反対に、煉獄・天国におけるダンテの意図の一つは、歴史に残っていない女性を選択するところにある。これこそが文学の仕事である。ボンコンテがカンパルディーノ戦いで戦死し、その遺骸が行方知れずとなったことは歴史的事実であり、当時の年代記の記録に残っている。しかし、ボンコンテが姿を消してからが文学の領域であり、ダンテは史料に残っていない出来事をボンコンテに語らせている。これはピアにおいても当てはまる。煉獄篇は、歴史



から忘れられ、記録されない人々を記憶の闇から掘り起こし、光を当てることをその目的の一つとしている。歴史に名を残す有名な政治家や英雄たちを地獄に置いたのも、このためである。神の物差しは地上的な名声ではない。確かに、ピアは寄る辺もなく、親族や周囲の人々から忘れられ、記録にも残っていない。しかし、ダンテはそれで《善し》としている。

3人の登場人物が代禱を求める相手は、次第にその枠が狭められている。ヤーコポはファーノの町の人々に代禱を求め、ボンコンテは親族に代禱を求め、ピアはダンテだけに代禱を求める。これが何を意味しているのかと言えば、ピアのことを思い出してくれる現世の人々の少なさであり、ピアの寄る辺なさである。ダンテが第5歌の最後に孤独な女性ピアを持ってきたのは、代禱を頼む相手もない孤独な女性でも救われることを明かすためである。ピアの《囁き》は何もまして雄弁であり、神に～またダンテに～聞き届けられている。今、彼女は煉獄にいるのだから。そのことを彼女自身の言葉が暗示している。彼女がダンテに何と言っていたか思い出してみよう。

130 「あなたが現世にお帰りなつた暁、  
133 どうか私、ピアのことを思い出して下さいませ。」

これはまさに、イエスとともに十字架にかかった盗人が、神であり主であるイエスにかけた言葉そのものである。

「そして（盗人は）イエスに言った。《主よ、あなたが御国に帰られた暁に、どうか私のことを思い出して下さい。》それに対して、イエスは彼に言った。《アーメン、おまえに言う。今日おまえは私とともに天国にいるであろう。》」  
～『ルカ福音書』23,42-43～

盗人の言葉「memento mei cum veneris in regnum tuum」をイタリア語に直せば、まさに  
「Ricorditi di me quando sarai tornato nel Tuo regno.

あなたが御国に帰られた暁に、どうか私のことを思い出して下さい」

であり、まさにピアはこの言葉を下敷きにして、「あなたが現世にお帰りなつた暁に、どうか私、ピアのことを思い出して下さい」と、言っているのである。この無名の盗人に墓碑銘はない。ピアにもない。ピアの人生が知られていないように、この盗人の人生も知られていない。どこの誰かも。しかし、神はそれですべて善しとされる。イエスだけが盗人の善性を理解して天国に置いたように、神だけは彼女の善性を知り、彼女を救済の網の中に掬い取った。夫から捨てられ、殺害され、世界で一人ぼっちになっても、どんなに世間から忘れ去られようとも、神だけは彼女のことを知っていてくれる。《かつて人が独り、孤立無援であったことなど一度もない》のである。

「《私はあなたと共にいて必ず救い出す》と主は言われた。」  
～『エレミア書』1,8～

誰からも見捨てられようとも、神だけは帰依する者と常に共にいてくれるのであり、それだけでピアの孤独な心を癒し満たすのに十分なのである。そしてダンテの意図はそこにある。イエスが盗人に「アーメン、おまえに言う。今日おまえは私とともに天国にいるであろう」と言ったように、ピアの囁きは神に聞き届けられて、「天国の住人」となる資格を得た。正午を回った今、一日の最盛期の時刻、それはキリストが誰からも理解されず、無名の盗人に混じって命を引き取った贖いの時刻である。その時刻に相応しい話をダンテはピアから聞いたのである。